

Ⅲ 紀要

1 『黒衣』から『ボランティア』へ

倉田公裕

(序)

「黒衣^{くろこ}」と言うものをご存じでしょう。歌舞伎をご存じの方には、申し上げるまでもありませんが・・・念の為。黒衣とは、文字通り黒衣を纏い、面を黒紗で覆い、舞台上で演技をする役者の後見(支援)をする人のことです。確かに、各種ある裏方の中で表舞台に出ているのです。当然、観客にも見えるのですが、その存在は「見えない」と言う約束になっています。そこで「黒衣」つまり、裏方役を引き受けた以上、舞台上のことを、あれこれ語るのは、おこがましく野暮なことです。

しかし、記録から消えるのを惜しみ、何とか残して遣りたいと、この場を与えてくださったのでしょ。折角の機会ですので、感謝を以て二、三を述べることにします。

(1) 鎌倉とのかかわり

鎌倉に住むようになったのは、浄光明寺の大三輪さんのお世話で、昭和63年に転入しました。しかし、仕事の場合は東京が中心で、全国、海外に及び、鎌倉は寝に帰るだけで、地元で奉仕する機会はありませんでした。

平成6年に「(仮称)鎌倉郷土館・美術館検討委員会」が開かれ、その委員を委嘱されたのが始まりです。鏑木清方記念美術館開館の4年前です。

実はそれ以前に、鏑木清方のご遺族代表、山田肇先生から、清方邸の土地・建物・作品を一括して寄付し、記念美術館を創りたいのだが、相談に乗って欲しいとのご依頼がありました。先生とは、昔から展覧会などのことで、交流があり良く存じ上げておりましたので、喜んでご協力することにしました。

(2) 清方さんとの邂逅^{かいこう}

一方、清方さんとは、サントリー美術館(昭和36年開館)の頃から、色々お教えを頂き、展覧会で、明治時代の道具や小物を拝借したり、その由来をお聞きしたり、お話を承っておりました。続いて、日本橋兜町に、近代日本画を専門とする、山種美術館(昭和41年開館)が、設立されることになり、その準備責任者として移籍。

翌年、美人画の展覧会を企画し、清方さんにご監修をお願いに参上し、快くお引き受け頂きました。その時以来、清方さんのお人柄に強く惹かれました。何よりも、若い学芸員の考えに耳を傾け、一人前の研究者として扱ってくださったことが、言葉にならぬ程の感激でした。その折の感激と感謝の心が、鏑木清方記念美術館のお手伝いをして、ご恩返しの一環としたいと決心させたのだと思います。〔この展覧会の監修は、清方さんの最後の展覧会監修でした。昭和47年にご他界されました。〕

(3) 専門委員となる

検討委員会は終了し、いよいよ実施に移されることになりました。ところがある日、引き続き「専門委員」を引き受けて欲しいとの要望があり、喜んでお引き受けすることにしました。過去の美術館作りのノウハウを活用し、清方さんに相応しい美術館にしたいと思ったからです。

専門委員としての初仕事は、寄贈された清方さんの作品の整理・調査でした。文学館の収蔵庫に保管されていた、作品や素描などの写真撮影・採寸記録・評価は、美術の知識のある有能な助手さんを得たこともあり、毎日が楽しく、予想以上に早く終わりました。暑い夏の日でした。収蔵庫での仕事は、冷房病症状に近くなり、些か体調を崩しましたが、楽しいものでした。

(4) 専門委員を交替して

年を重ね、私も次第に体力も気力も落ちてきました。そこで「専門委員」の世代交替を提案し、了承されましたが、新委員の推薦を任されることになりました。新しい「委員」は、鎌倉在住で、経験のある優れた方をお願いしようと思い、意中にあった人、即ち、旧知の東京都美術館館長、真室さんにお目に掛かり、お願いしましたところ、即座に快諾を得て「専門委員」を交替し、私の公式な関係は終わりました。が、新委員を補助するために、引き続き協力することにしました。

(結)

真室さんが、初代館長に就任され、宮崎学芸員が課長になり、美術館としての活躍が他から評価されるようになってきました。詳細なことは、正式記録を見てください。そこで、尚一層の応援をするために、美術館ボランティアの会を作るべく、研究会を開き、第一期生(3名)と共に、ボランティア活動[「清雅会」と名付ける]を始めました。私も山坂2キロの往復は、大変負担と感じられるようになりましたが、可能な限り協力したいと思っております。それが、清方さんへの御恩返しと思うからです。

(元・専門委員 現・ボランティア清雅会会員)